



「ああ無情」

新年の始めに③

フランスの文豪、ピクトル・ユーゴーの名作「レ・ミゼラブル」。一切のパンを盗んだために十九年間も監獄生活を送ることになったジャン・バルジャンの波瀾(はらた)の生涯を描いた長編小説。小さいころ「ああ無情」というタイトルの小説で読んだ記憶がある。と断ると、昔読んだ幼



全集の「ああ無情」と岩波少年文庫の「レ・ミゼラブル」上・下

が送られてきた。活字の大きい「ああ無情」を心ときめかせながら読む。その時は「ああ無情」と「レ・ミゼラブル」のタイトルの違いは気にもならなかった。

新年に入って、教皇フランシスコが公布した「いつくしみの特別聖年」について書いたが、

神のいつくしみ…何か抽象的で今ひとつ自分のものになりきらない。その気持ちを毎月一回、山口のカルメル会で霊的指導を受けている中川博道神父に話した。神父は「翻訳にも問題があるのかもしれないね」と言われる。「いつくしみの特別聖年」の「いつくしみ」はラテン語の「ミゼリコルディア」を訳したものだという。

ちぎれるほどの愛のこたえ周囲のすべての人が見捨てても、いつくしみの愛である神はその人を見捨てられることはない。ミゼリコルディアという言葉はそんな神の愛のこと。

抽象的な概念ではなく、わが子に体の奥底からわき起こる親の愛のように「はらわたが

神父は「こう説明しても、今、あなたの肌で

それを実感できないかもしれない。しかし、真剣に神を求め、自分の心の荒野を経験し、愛の未熟さを自覚して祈りの中で生活されたら、きっとあなたの肌でミゼリコルディアである神を体験されると思います」と言われる。神の愛は理屈や抽象論ではないと言われることはわかる気がする。

正月明けにイギリスで買求めた「レ・ミゼラブル」のコゼットの顔入りマグカップで熱い紅茶を飲んでいたら、ふと、ジャン・バルジャン



クイーンズ・シアター前で

「レ・ミゼラブル」はラテン語の「ミゼリコルディア」と同じ意味。ジャン・バル

ジャンは出獄後、泊めてもらった司教の銀の燭台を盗み、警官に捕まった時、司教は「彼が盗んだものではありません。私が彼にプレゼントしたものだ」と言う。ユーゴーは司教をミゼリコルディアの神として描いているのだ。一人の貧しい男が聖者のような人間になる過程を描いたみ干した。